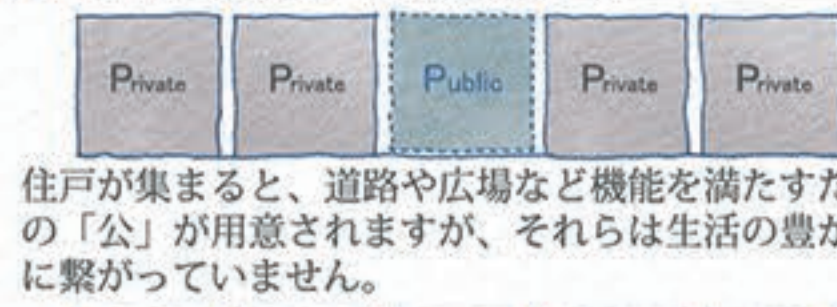


公を纏う住宅

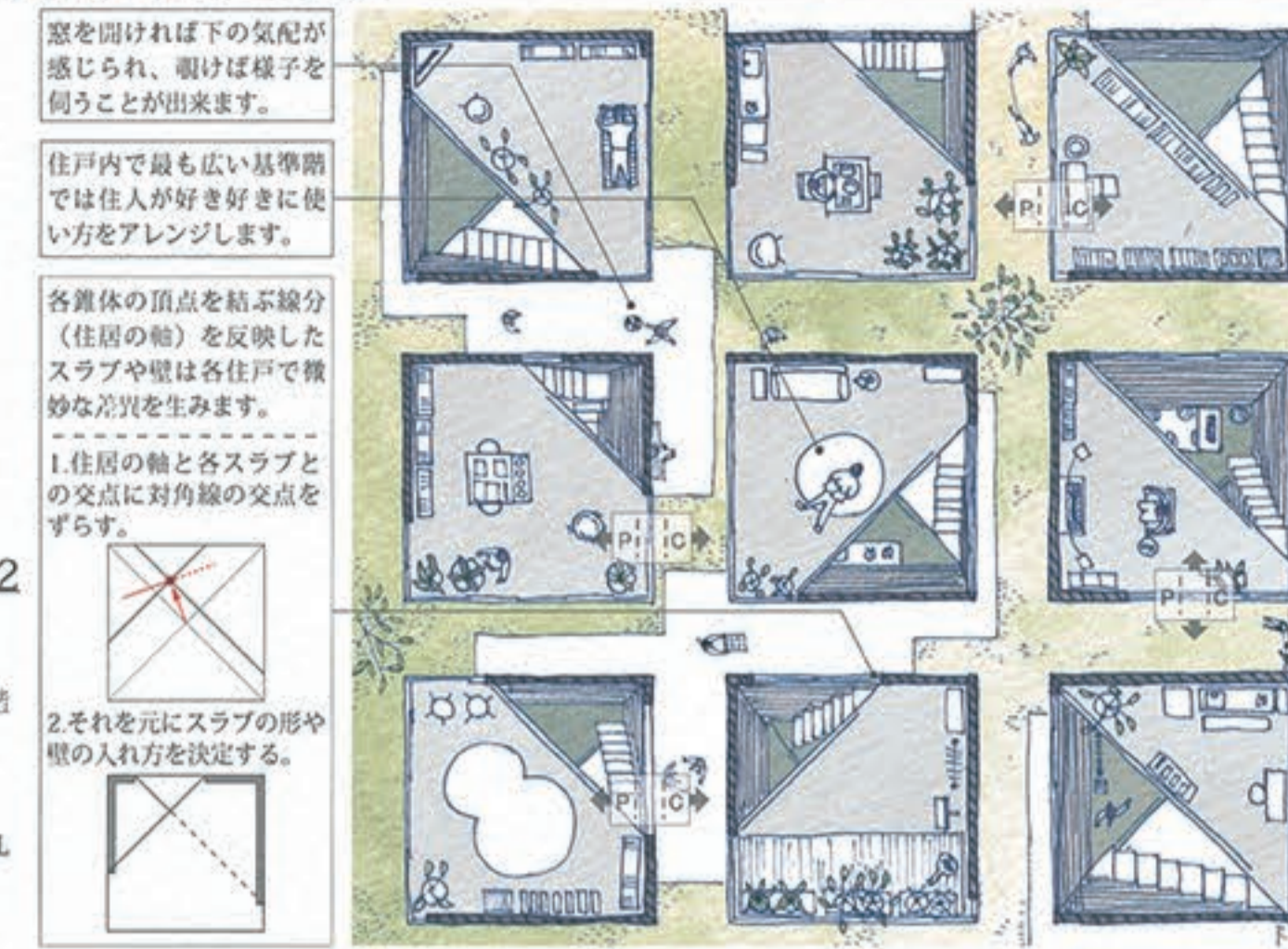
「私」が集まり「公」に化ける



住戸が集まると、道路や広場など機能を満たすための「公」が用意されますが、それらは生活の豊かさに繋がっていません。

小さな公共性を纏った住戸が集まることでその公共性を増幅させ、居心地のいいコモンを形成します。

Diagram-1 住戸の詳細



この住戸には2つの「公/私」があります。
1. パフタイプ
2. ボーダタイプ

P = Private / C = Common
P=C
P=C

この住戸には2つの「公/私」があります。コモンとの間を壁で明確に区切ることで、コモンと住戸の近接性を可能にします。

Floor plan 1:200

住戸の基本構成

1. 一つの住戸は2つの四角錐の組み合わせで構成され、頂点A, Bの平行移動をパラメータとして決定されます。



2. 頂点A, Bは共に住戸間のあり方に変化を及ぼします。頂点AはGLでの距離に、頂点Bは基準階での距離感に影響します。

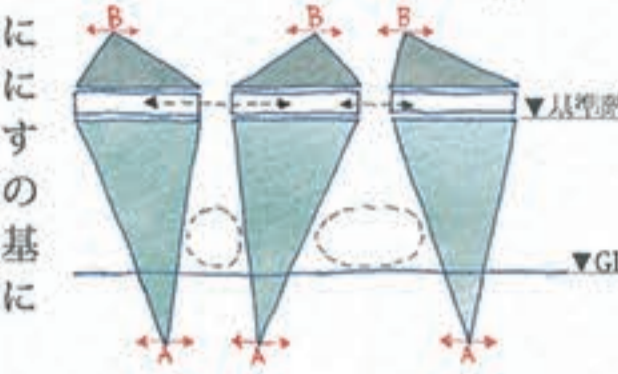
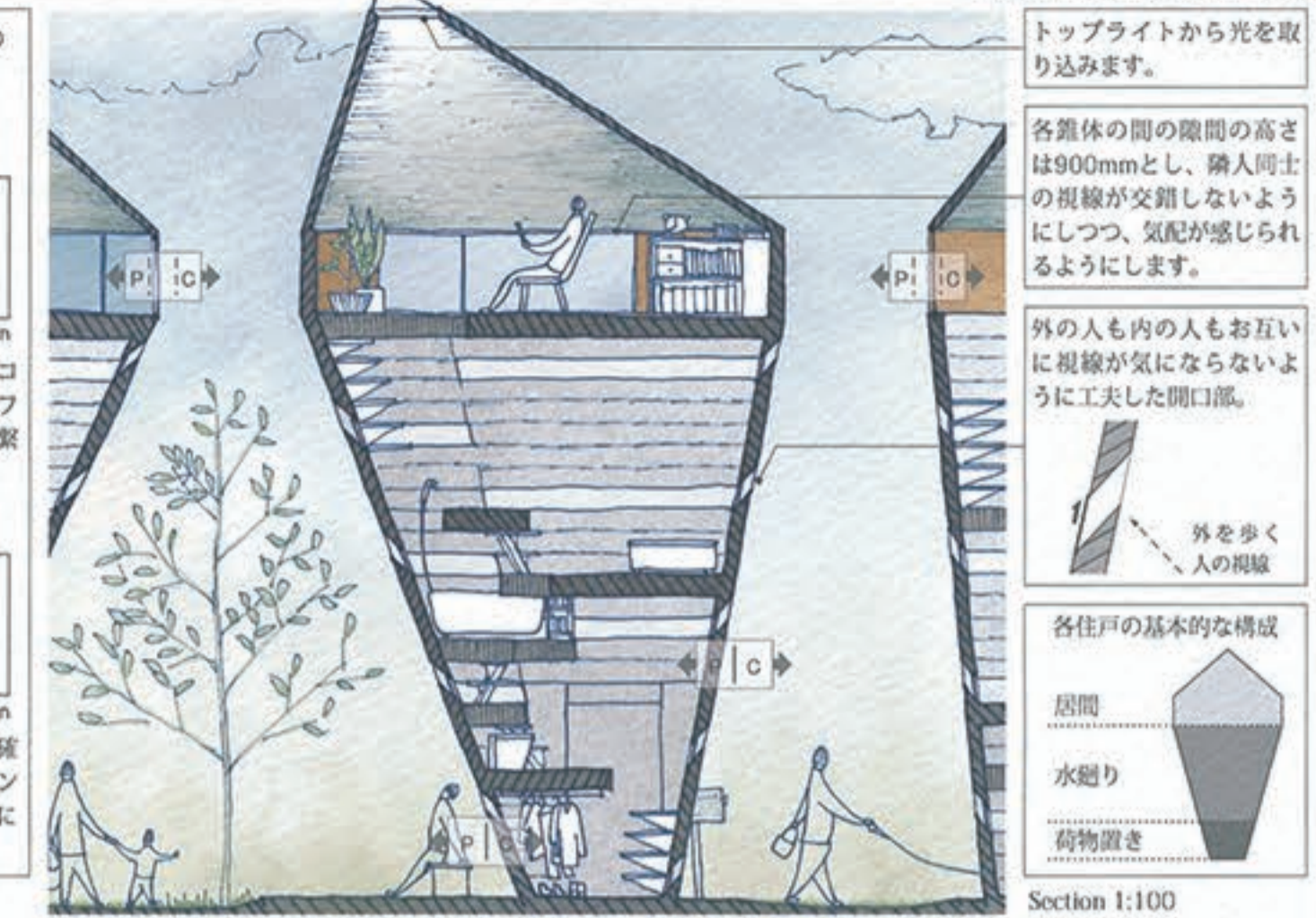


Diagram-2

Floor/Section Plan



Section 1:100

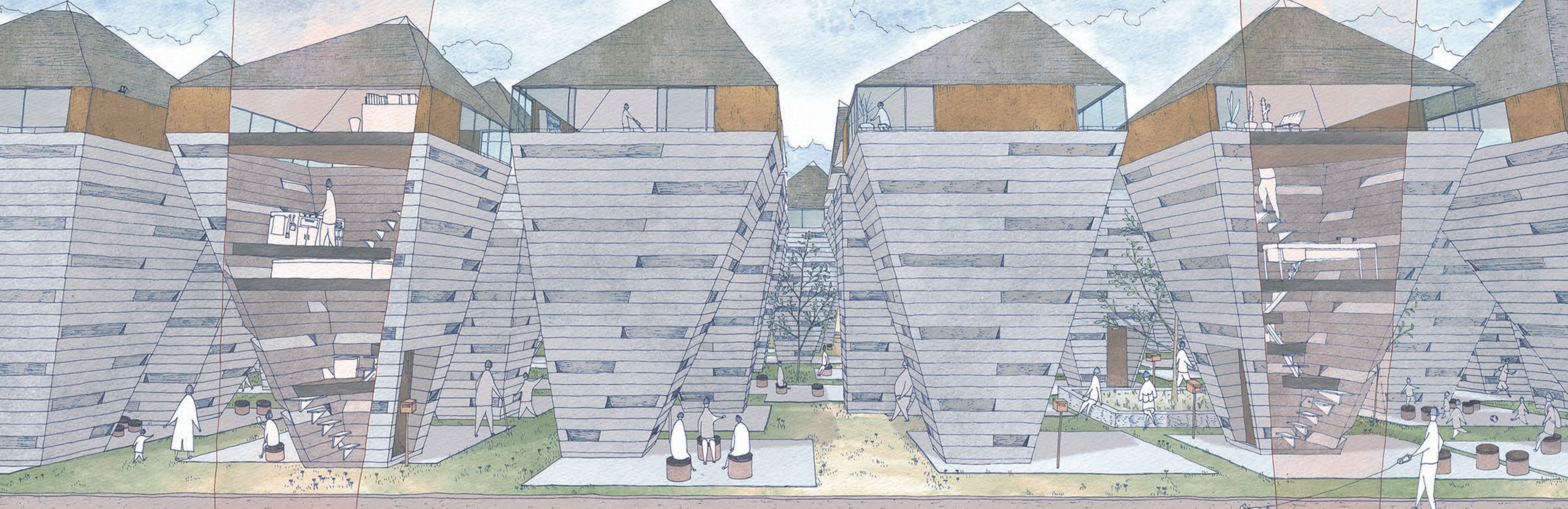
「公」の過渡期

社会全体が成長・拡大から成熟・縮退へとフェーズを移して以降、公共のあり方は問われ続けています。「私」だけでは成り立たない社会において、「公」を支える主体は誰なのか。

服を羽織るように「公」を纏う

都市化が進む前の住宅では、それぞれの住宅が家族以外の人を内包するような「開くこと」によるローカルな公共性があったように思います。しかし、細分化し閉じた現代の住宅には「公」を内包する懐の深さはありません。そこで、服を羽織るように『小さくてローカルな「公」』を纏った住宅が集まることによる、近代の『大きな「公」』とも、一昔前の住宅の『開いた「公」』とも違う公共性を提案します。

行きつけのカフェとドア一枚で繋がったような住宅です。顔は見たことがあるけれど名前は知らない人が居て、寝巻きでは行けないけれど短パンでいいやと思える、そんな場所が住宅を包みます。そこで生まれる生活の連帯感、住人同士だけでなく、地域まで広がりを生みます。

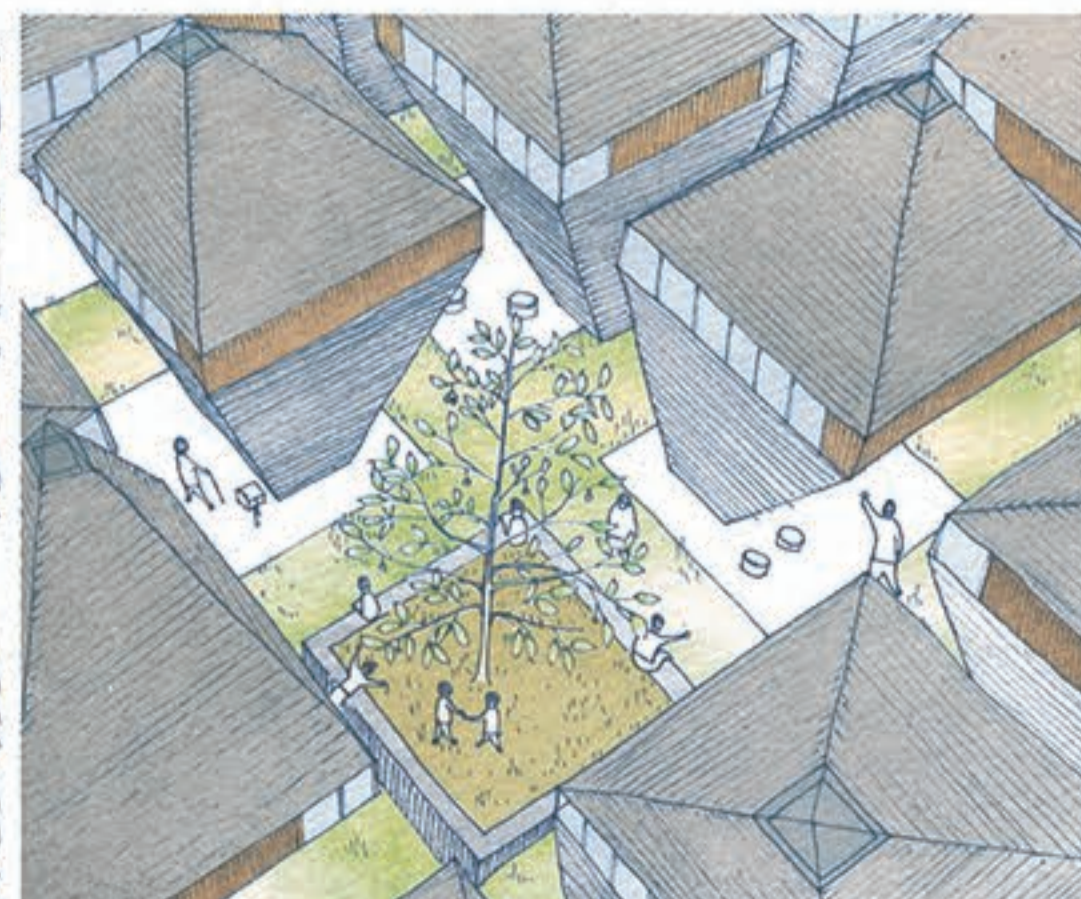


コモンに入ると、住戸の作り出す様々な距離感や抜け感、舗装面の繋がり、そして陰影が重なり合い、多層的で広がりのある不均質な空間が広がります。住戸間の距離感や出入口(付随してポスト)の位置などいくつもの要素によって、均一ではない、濃度にムラのある「公」が生まれます。

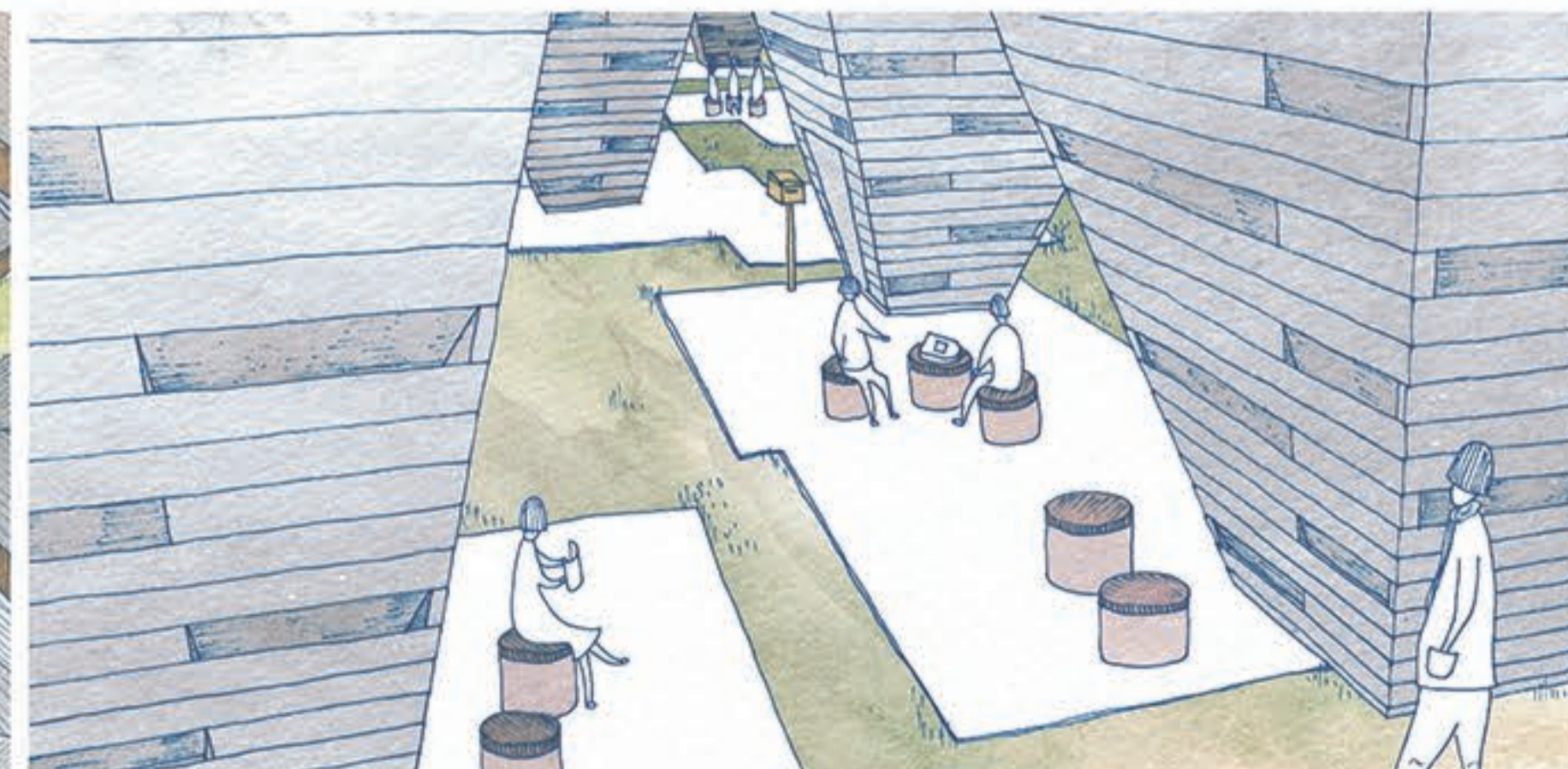
計画敷地 / 全体計画



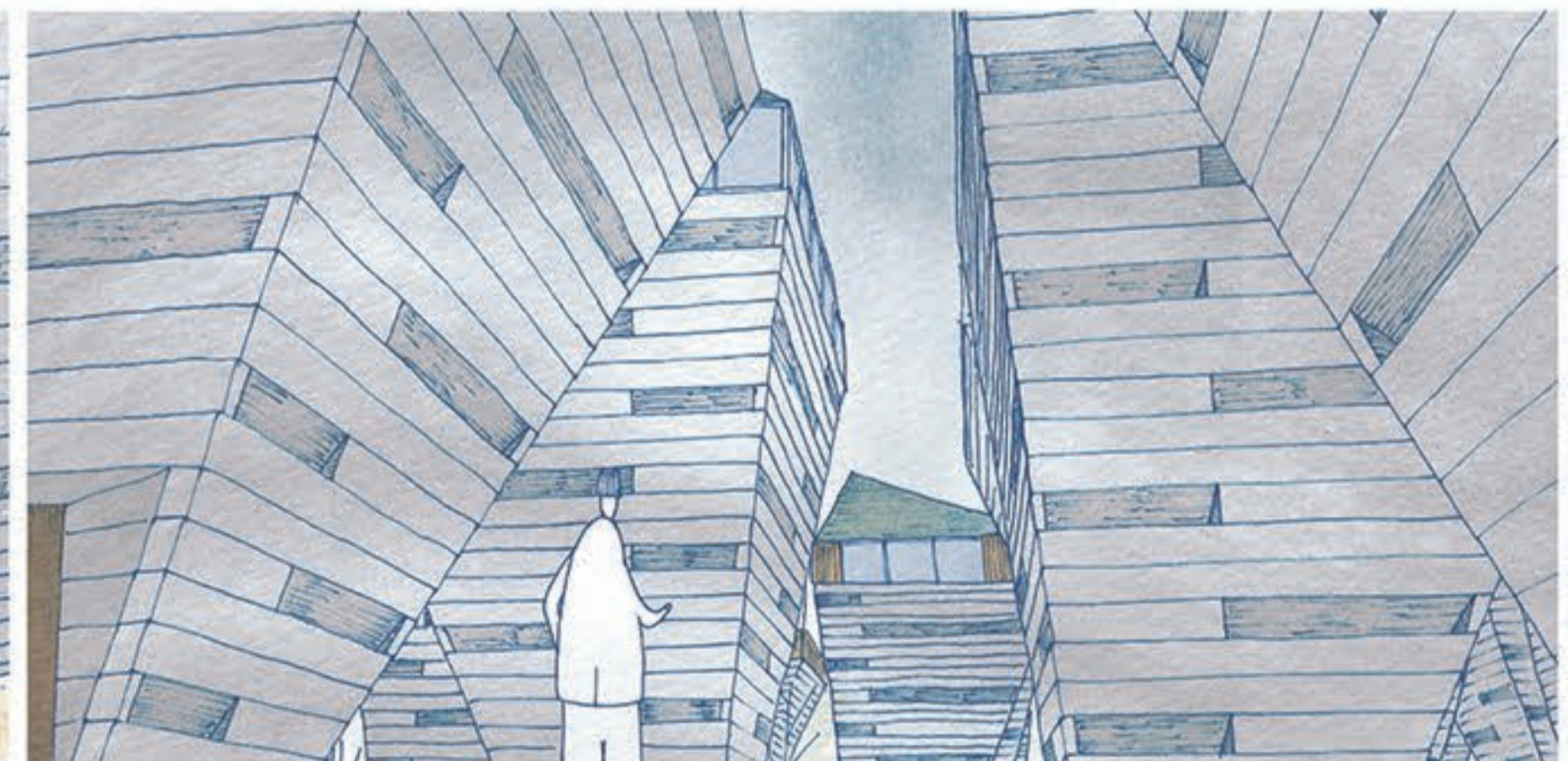
駅から近い戸建住宅、市営住宅、保育園に囲まれる場所に全75戸の住戸を少しずつずらしながら4つに分けて配しました。この住宅群に住む人だけではなく、近所に住む人や保育園の児童なども通ずる、地域のコモンとなります。



全体で4箇所、住戸の代わりに溜まり場をつくります。それぞれ木と水の2つをテーマとし、コモンにメリハリをつけます。



コモンの舗装面は頂点B(上)を中心とした四角形とし、下の四角錐とは別のルールで繋がっていきます。それによりコモンにおいて上下の錐体が作り出すリズムが重なり合います。



少しの移動で視線の抜け方が変化したり、壁がつくる懐の深い場所など多様な場所があるので、その日の天候や気分によって好きな場所を見つけて過ごすことができます。